
鎧に宿りし幽霊と狐耳の少女

猫谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎧に宿りし幽霊と狐耳の少女

【Nコード】

N9257X

【作者名】

猫谷

【あらすじ】

「きゃあああああああ！」

暗い通路。明かりとなるのは、外から持ち込まれた松明やランタンだけの世界に悲鳴が響き渡った。

悲鳴を上げたのは、年の若い少女だった。おっかなびつくり迷宮を彷徨う少女は、松明に照らされ多少明るくなった闇の中で、此方の姿を見たら悲鳴を上げて倒れてしまった。

年のほどは15、6歳といった所だろうか。腰に安物の片手剣を吊るし、皮鎧を着ている。檻褌のように擦り切れた外套を纏い、秋の

稲穂のような色合いの髪を馬の尾のように後頭部で纏めている。胸や尻は薄く、肉付きは良くない。痩せ細っているというのが正しいだろう。顔は非常に整っていて、後数年もすれば引く手数多な事は明白だった。顔の横に純人の耳はなく、頭部に狐のような耳があった。おそらく狐人^{きつねびと}なのだろう。

「さて、どうするか…」

鎧は出会い頭に気を失い、危険な迷宮で悠長に眠りこける亜人の少女を見下ろして呟いた。

迷宮を彷徨う鎧のお話 1

『鎧の幽霊と狐耳の少女』

「きゃあああああああ！」

暗い通路。明かりとなるのは、外から持ち込まれた松明やランタンだけの世界に悲鳴が響き渡った。

悲鳴を上げたのは、年の若い少女だった。おっかなびつくり迷宮を彷徨う少女は、松明に照らされ多少明るくなった闇の中で、此方の姿を見たら悲鳴を上げて倒れてしまった。

年のほどは15、6歳といった所だろうか。腰に安物の片手剣を吊るし、皮鎧を着ている。襦袢のように擦り切れた外套を纏い、秋の稲穂のような色合いの髪を馬の尾のように後頭部で纏めている。胸や尻は薄く、肉付きは良くない。痩せ細っているというのが正しいだろう。顔は非常に整っていて、後数年もすれば引く手数多な事は明白だった。顔の横に純人の耳はなく、頭部に狐のような耳があった。おそらく狐人なのだろう。

「さて、どうするか……」

鎧は出会い頭に気を失い、危険な迷宮で悠長に眠りこける亜人の少女を見下ろして呟いた。

『迷宮を彷徨う鎧のお話』 Part 1

パチパチと薪の爆ぜる音と、少女の呼吸音。その二つだけが静寂に満ちた石室に響くものだった。

パチッと一際大きく薪の爆ぜる音がした。

「ん、んっ」

薪の爆ぜる音に誘われて少女が目を覚ました。

「んー」、と少女は固まった筋肉を解すように伸びをした。少女

に掛けられた厚い黒染めのマントが肩から落ちた。

「よく寝た。……ここ何処？」

たつぷり数秒間ほど伸びをした少女は、見知らぬ場所に居ることに気付く。少女は用心の為に、腰の剣に手を伸ばした。

「あれ？」

伸ばした手は空を切った。武器は取上げられていた。少女の額にたらりと汗が流れた。

「もしかして、この状況は非常に不味いのでは？」

「ようやく気付いたのか？」

「ひゃあ！」

横合いから聞こえてきた硬質な声に少女は短い悲鳴を上げた。

「な、なな何!？」

少女は両手をクロスさせて腰を低く構える謎の闘技、狐拳の構えを取った。少女が子どもの頃に考えたオリジナル拳法である。実用性はない。

「そんなに怯えるな、取って喰いやしないよ」

「ふ、ふん。騙されるもんか！ 姿も見せない奴が信用できる訳ないだろ！」

「……姿は最初から見せているのだがな」

「な、なら何処にいるんだよ！ 姿を見せろよ！ 泣いちゃうぞ！」

少女はその宝石のように綺麗な瞳に涙を浮かべて言った。

「目の前に居るわ」

「目の前って……」

少女は涙の滲む瞳を凝らして目の前の空間を凝視する。目の前には木製の椅子に腰掛けた鎧しかなかったから、何らかのスキルで持つて空間に隠れているのだと考えたのだ。

「…鎧しかないじゃないか」

「その鎧が俺だからな」

動かくなど考えてもいなかった鎧が動き、右手を上げた。

「きやあ
あああああ！
お化けえええええ！」

少女は氣を失った。

「はぁ」

鎧のため息が静寂に満ちた石室に空しく響いた。

パチパチと薪の爆ぜる音が石室に響く。石室には椅子に腰掛けて、傍らの大剣を手入れする動く鎧。粗末な木のベッドに厚めの布を3枚重ね、その上につい先ほど気絶した狐耳の少女が眠っていた。

シャツシャツと大剣を研ぐ音が響く、満足な仕上がりになったのか、鎧は大剣を鞘に戻し壁に立て掛けると、少女から取上げた安物の剣を拾い上げ、砥石を当てる。石室に片手剣を研ぐ音が響いた。

それから暫しの時間が過ぎて、鎧が片手剣の仕上がり満足した時、少女が目を覚ました。

「起きたか？」と、ぽやーと寝ぼけている少女に鎧は声を掛けた。

「おはよー」

「寝ぼけているのか？」

少女は片腕を上げて鎧に挨拶し、鎧は少女が未だ寝ぼけているのだと判断した。だって、悲鳴上げてないし。

「……………」

「……………」

見つめあう2人の間には静寂があった。

「お、おはようございます」

「ああ、おはよう」

『迷宮を彷徨う鎧のお話』 Part 2

「えっと、じゃあ、鎧さんが気絶した私を此处まで連れて来てくれたんだ」

「ああ。その通りだ（気絶した原因も俺だが黙っておこう）」

「ありがとね」と、少女は朗らかな笑みを浮かべてお礼を言ったのだった。

パチパチと焚き火にくべられた薪の爆ぜる音だけが響く。

「そういえば…自己紹介がまだだったな。俺の名前は鎧。見ての通りの鎧だ」

「鎧？ 随分とまた安直な名前だね。私の名前はリリー。リリー・ステルム。リリって呼んでよ」

「ああ、分かったよ。ステルム」

「分かっただけじゃん」と、頬を膨らませるリリーを見て、ククッと大河は忍び笑いを漏らすのだった。

「それじゃ、そろそろ地上に帰った方がいい。…送ってこう」

鎧は少女を見詰め、地上付近まで送って行く事にした。少女は細く、腕力がある様には見えないし出会ったときの様子からして迷宮には未だ不慣れであろうことが察せられた。1人で地上まで戻れると判断する事は出来そうになかった。それに、なにより…

「え、いいよ。大丈夫、1人で帰れるから」

「帰り道。分かるのか？」と、言外に気絶していたのだから分らないだろうと潜ませて、鎧は言った。血に塗れた鎧を見て気絶した少女をこの石室まで運んできたのは鎧だ。当然、少女はこの石室から帰る道順など知る由はなかった。

「…分からないです」と、少女は多少気落ちした様子で言うのだった。

結局、彼らは連れ立って石室を後にしたのだった。

「ギャン」

暗い通路に、黒い犬の断末魔の叫びが響く。黒い犬は、黒の体毛と3つの瞳が特徴的な魔物である。迷宮の上層部では何処にでも存在し、強い魔物の子分となっている事もあれば、斥候として餌である人間を探したり、徒党を組んで襲ってきたりする厄介な魔物であった。

しかし、そのような魔物でも鎧の敵ではなかった。

「うわー、鎧さん強いなー」と、リリーは鎧の強さに、きつと強い

のだろうなとは思っていたが、実際に目で見て感心しきりだった。鎧の大剣が唸りを上げて振るわれる度に、黒い犬の群れから1匹、時たま2匹ほどが纏めて絶命していた。鎧には敵わないと判断してリリーを狙う黒い犬もいたが、鎧を抜ける筈もなく、次々と死んでいった。

リリーも剣を抜き応戦しようとしたが、それは鎧に止められた。鎧曰く、ステルムにはまだ早い、との事だった。そんな訳で、リリー・ステルムは剣を抜く事もなく、手持ちぶさにしながらも悠長に鎧と黒い犬6匹の群れとの戦いを眺めることが出来た。そこには絶対的強者に護られているという余裕があった。

「ギャワン」

群れの最後の1匹が2つに切り分けられて絶命した。

ブンと鎧が大剣を振って血糊を飛ばし、厚手の黒のマントで血を拭いた。このマントはリリーが気絶していた際に掛けられていたマントと同じ物で、今回初めて着た鎧にとっての一張羅だった。

「怪我はないな？」

鎧の問いかけにリリーは首を縦に頷いた。

「鎧の後ろで見ていただけだからね。怪我のしようがないよ」

「なら良い」

鎧は前を向いて、通路を、地上を目指して歩き出した。リリーもそれを追って歩き出すのだった。

2 (後書き)

目標は一日一回の更新。
…今日中にもう一話上げればセーフな事に
しよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9257x/>

鎧に宿りし幽霊と狐耳の少女

2011年10月27日01時03分発行